
常平奇譚 赤雨編

三河可可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

常平奇譚 赤雨編

【Nコード】

N0879P

【作者名】

三河可可

【あらすじ】

常平とこひらの国に一人の少年がいた。少年が父から教えられた謡い詞（文・もん）が、少年を異界の者とを巡り合わせる。徐々に距離を縮める二人の平穏に、徐々に現世のしがらみが忍び寄る。大切な者を守るための二人の選択は…

常平とこひらの國の奥には、なだらかな山が幾つも連なる。夏は山を越えて冷たい風が吹き下ろす。冬は山を越えて雲がたちこめ、大きく天を覆って雪を降らす。

その山々のふもと、東の国境にほど近い小さな山村に、びんという少年がいた。

年は幾つか分らない。それを覚えていてくれる人はとうに亡く、また思い返そうとしてくれる人もいない。

ただ、声はまだ高く、身は細い。

数年前まで、常平は隣国定原さだはらと長い戦いを続けていた。

外海に面する街、栄さかえの治権の奪い合いが発端であつたが、一年二年と戦乱が長引くにつれ、両国は互いに当初の目的などは忘れていた。何か理由を見つけては、小競り合いばかりが繰り返された。

名の通り外海に通じる諸国との交易によって繁栄を見せていた栄は、廃墟と化した。

街人は流れ者となって辺境に散つた。

そうして、栄で育つたびん少年は両親と共にこの山村にたどり着いた。

戦いの続く栄にいるのは危険だつた。しかし、街人にとって自然敵しく閉鎖的で排他的な山村での生活は心身耐え難いものであつた。一年もすると過労で弱っていた両親は流行病であつてなくなり、あそこには一人、びんが残された。

停戦の盟約が交わされたのは丁度一年前のことだ。

常平も定原もお互いに矛を交わすことに疲れ、倦んでいた。

久しぶりに国内に目を向けた帝は、流民の多さに啞然とした。戦乱

で住む土地を追われた者、兵役を逃れるために里から出た者。多くの者が自分の田畑を棄て、国内を彷徨っていた。

―― 一月のうちに自分が籍をおく所へ帰るよう。

帝が出した勅は効をなさなかった。長い戦乱の世に人々は流民であることになってしまったのだ。

自分に縁のない土地に住むのは辛い。しかし、村へ帰っても税を払うに手一杯の荒れ果てた畑しかない。多くの者がそれを天秤にかけ、前者を選んだ。

びんは流民であつた。

彼は戸籍を持つていなかった。

長引く戦乱はそのような流民の孤児を多く残した。親が死んだ子は“託所”という施設に集められた。

びんもまた、他に行き場がないため“託所”に身を置いた。

託所では最低限の生きる糧を得られる。しかし大人でさえ生きていくのが厳しい世の中、実質そこは使い捨ての労働力の提供所、または人身売買の斡旋所のような様相を呈していた。

子供らは少ない食で昼夜牛馬のように働いた。人が世話してくれる分、牛馬の方が扱いがいい。牛馬は死んだら困るが、びんたち孤児の死は悲しむ者も、困る者もない。

びんのいる託所には入れ替わり立ち替わり二十人ほどの子供がいた。下は嬰兒から上は十二三まで。十二三になると男も女もどこかへ連れて行かれた。残された子供に彼らの消えた先を知ることができない。

与えられているのは粗末なあばら屋一棟だった。床は隅が腐り、足を動かす度に軋む。天井屋根は雨露をしのがず、壁の隙間からは風が外を吹くと同じにごうごうと通る。

冬はとくに辛い。仕事の合間にかき集めた細木を焚き、身を寄せ合

うよううにして眠る。次の朝は体がしびれたように動かないこともあった。

吐く息が白い。

——もうすぐ、あの冬がやってくる。

びんはぶるつと身震いをした。それは、まぎれもない恐怖だった。

「……」

びんは文を口の中で唱えた。心に波風が立つと、びんは決まって父から教わったその文句を何度も唱えるのだ。すると、不思議と心が鎮まる。

吐息を一つついて、小枝を抱えて託所に戻ろうとした。その時、

「なんだ、小僧か」

後ろから声が聞こえた。

全く気配がなかっただけに肝を抜かれ、ぎよつとしてびんは振り返った。振り返ってさらにぎよつとする。

「なかなか良い気がしたのでつい興に押されてしまったが」

びんの驚きなどお構いなしに涼しげな顔で話し続けるのは、奇妙な男だった。

頭髮が、白い。腰まで伸びたその真っ直ぐな髪をくくりもせず下垂している。色も、風体も異様であった。

白く透き通るような肌の面は、これも驚愕に値する。闇の様な濃紺の目は、瞳孔が縦に長く、蛇を連想させる。涼しく鋭く計算高そうだが、生まれたままの本能的な純粹さが垣間見える美しい目だった。弓なりの眉、細い鼻梁、赤く薄い唇。

その造作何れもが個々に魅力的。さらに統一された全体の造形も美しい。

身を包むものはシミ一つない白の単衣。さらさらと流れるその艶やかな衣は、一目で絹と見て取れる。

びんは、口をあけて、まじまじと男を見つめた。意識してやっているわけではない。

「無礼じゃな」

男の言葉にびんははっと我に返った。しかし、相応の礼など知らぬ。ただ惚けたように突っ立ったまま。

「ふむ。ますます解しがたい。見れば見るほどただの小僧じゃ…。はて先ほどの気はいかようにして感じたか」

男は独語した。怪訝そうに眉間に薄くしわが寄る。

「名は何という」

非常に高圧的な態度である。しかし、それがいかにも自然であった。

「…びん」

「びんか。良い名じゃ。して、先ほどの文はどこで習った？」

「お父から」

「…父とな」

男が口の中で反芻するように呟いた。

「もういちど聞かせてたも」

そう言うとき男はその場に座して目を瞑った。そんな態度をとられたから、びんは否応なしに文を唱えねばならなくなった。

数多の芥は漂い

滂沱の涙は流るる

数多の人々の様

纏るる綾系の如く

この世の理はそれなお混沌

すうと男の口から息が漏れた。

「好」

目を開けるとその瞳は赤く燃えていた。

「良い声だ」

一瞬の後にはもう、もとの濃紺に戻っている。

「また、聞かせてくれや」

そういつて森の闇に消えた。

*

*

*

*

*

白鬼とは幾度か森で会った。

白鬼の呼び名はびんがつけた。はじめてその名で呼んだとき、白鬼はのけぞって笑った。いつもの居丈高で近寄りがたい気色を吹き飛ばすほどに、それは魅力的な笑みだった。

凍える季節に名を決めて、今は神鳴りの響く夏の口。

白鬼は不変。現れる時は、常にシミ一つ無い白い衣を纏う。透き通る肌は寒さにひび割れることもない。暑さに汗ばむこともない。

「さあ、聞かせてくりやれ」

現れると、美しい口が強要する。

びんが疲れきっている目で睨んでも、懇願しても譲らない。その傲岸さ。

嘆息混じりに、恨みがましくびんは歌う。

何度も何度も。白鬼が姿を消すまで。

嫌々歌い始めても、そのうちに身体が空気に溶けるような心地になり、寒さも暑さも感じなくなる。歌っていることも忘れ、己の存在も忘れ、真っ白になる。

びんはその感覚が好きだった。

託所から、森の茂った木立を抜けたところに、小川が流れている。光を受けた川面が、集めた光を気前よく四方にばら撒く。その柔らかな破片が木の幹、河原の石、びんまでを綺羅と照らす。

喧騒を離れて、せせらぎだけが唯一の音源。その静けさが心地よい。小さな河原は、びんの慰めの場所だった。

白鬼は、そこに現れた。

「なぜ泣く」

白鬼の不意の問いかけをびんは無視した。

——なぜ？それが分かるのならば、こうやって一人で声を殺して泣くものか。

故がわかる悲しみならば、泣く前にその根を断つてやる。

泣くことがどんなに意味のないことか。

泣いても腹はふくれない。泣いても父母は還らない。泣いてもこの暮らしから逃れられるわけではなく、泣いて乞うても命はとられる。泣くことは無意味と、この小さな身体に刻んで生きてきた。

——しかし、それでも。泣きたいときはあるのだ。

それを、むぎむぎと愚直に問いかける白鬼の無神経さにびんは苛立った。

「泣くことに故などない」

白鬼に向けた目に宿るのは、憎しみすら垣間見える鋭い眼光だった。白鬼は、その射るような視線を全く意に介さないかのように飄々とかわした。

びんの全身をくまなく眺め、合点のいったような表情をみせる。

「…そんな小さな傷を痛んで泣くことはあるまいよ」

その言葉に、びんは全身の力が抜けた。

白鬼の視線の先。自分の膝に目をやると、ここまでの藪道で草に切

れたのだろうか、小さな切り傷が幾筋か浮かんでいた。

——こいつは…

こいつは本当に俺がこの傷で泣いてると思っっているのだろうか…。

びんは怒りも忘れて白鬼に目を遣り、その真意を窺った。

白鬼はその視線に気付く素振りもなく、びんの膝に手を当てた。

「こんなもの、わしにかかればすぐに治る」

今の白鬼には、びんの傷しか目に入っていないようであった。ただひらすら一心不乱に膝を撫で続ける。

白鬼の必死な様子を見て、びんはいつのまにか自分が微笑んでいることに気付いた。

何故だかは分からねど。河原に来た時の、故なく心にあいていた穴が少しずつ埋まっていった。

——ああ、確かに。

俺は膝が痛くて泣いていたのかもしれない…。

白鬼が触れた膝が温かった。

そのぬくもりは全身を巡り、抗えぬ眠気にかられて、びんは白鬼の胸に顔をうずめた。

その寝顔には年相応の幼さと、母親に抱かれた赤子のような安らかな笑みがあつた。

*

*

*

*

*

来る。

その日も予感があつた。

いつも唐突な白鬼の来訪を、歓迎したことは一度もない。しかし常ならば、どこか待ちわびる気持ちが無いわけではなかった。だが、今日は…。

日が傾きかける刻。薪を担ぎながら託所へ歩を進めるびんの前に、白鬼が姿を見せた。

「びん、機嫌うるわしゅう」

気に触るほど慇懃に、身をかがめる。態度とは裏腹に声音は傲慢だ。「いつものを頼むぞ」

びんが歌うことを承知するのを当然とばかりに、白鬼はそそくさと適当な座所を見つけ腰を下ろした。

「だめだ。日没までに帰らなきゃならない」

一瞥をくれただけで去ろうとするびんの様子に、白鬼は眉を上げた。「まなを手伝ってやらなきゃ」

びんは幼い少女の顔を思い浮かべた。

「…その、片目の少女がどうしたのじゃ」
ぎよつとした。びんはまなのことを白鬼に一言も喋ったことはない。

まなは託所の女児だ。流行りの病で片目を失っていた。身体は酷く痩せていて、年は七つだが、それよりも二つ三つは幼く見える。七歳ともなれば十分に働ける年であるのに、身体が小さいまなは大した労働力にならなかった。それが託所の婆の気に障るらしい。まなは事あるごとに折檻を受けていた。

昨夜まなは寝小便をもらした。婆の怒りはすさまじく、その折檻はまなが気を失っても止まなかった。寸でのところでびんがやっと引き離れた。

びんはこの小さな少女の不遇を気にかけていた。自分のことで精一

杯で他人を顧みる隙などないのだが、それにしても婆のまなに対する仕打ちはあまりにも惨かった。

今朝まなは身体のいたるところを腫らして起きてきた。熱があるのだろつ、足下はおぼつかなく、切れてまぶたのめくれた眼は真っ赤に潤んでいた。

そのまなに婆はなお言いつけた。

「薪を十束集めてこい」

十束など、到底この体格で背負いきれるものではない。その残酷な指令を、粗末な朝食の並ぶ食卓についていた十五人の子は一樣にうつむいて聞いた。

——可哀相なまな。でも、かばったりすれば婆の怒りの矛先は自分に向かう。

熱っぽく潤んだ眼をして、ふらふらと山へ入ったまなの背に、びんはどうしようもない苛立ちを感じた。

「帰らなきゃ」

びんは突っぱねるように言った。腹を立てていた。白鬼の態度に。そして自分自信に。

「まなを手伝ってやらなきゃ……」

なお一層、歩を速めた。

「他人のことをなぜ気にかける？」

びんに並びながら漏らす白鬼の口調は、心の底からそれを疑問に思っているようだった。

——なぜだと？

腹が立った。白鬼のすまし顔をめっちゃめっちゃにしてやりたい衝動。

「鬼にはわからん」

そういつて山道を駆け下りた。

託所に帰り着くと、床でまなが眠っていた。小さな身体を何かから逃げるように屈めて、しかしその顔は安らかだ。

「何してる。また、婆に怒られるぞ」

そう言っただけで起こそうとした時に気が付いた。その身体は冷たかった。朝見たまなの背。虚ろで、乾いていて、なのに一方で滲むような暗い湿り気を感じさせる。あれは…戦で見た死に逝く人の背であった。

まなは小さな穴に丸まるようにしておさまった。

墓穴を掘るように命じられた五人だけが彼女を見送った。

三

白鬼は現れなくなった。
そして、一月が過ぎた。

ある日、山道に白いぼろが落ちていた。

「白鬼」

何をしてびんが“それ”をそのように呼んだか、定かでない。なにせ、その風体はまったく以前と異なっていたから。

ぼろのように見えたのは、以前の豪華な絹だった。染み一つ無かった衣は泥にまみれ、垢じみている。

呼ばれて顔を上げた白鬼に、びんは息を呑んだ。

白くなめらかだった肌は黄色くくすみ、茶の斑が浮き出していた。美しかった目は半ば潰れ、腫瘍が濃み固まっていた。長かった髪は千切れ、頭髮の量も少ない。

顔、腕、脚…ぼろから出ている箇所には無数の切り傷が走り、血がにじんでいた。

「わしは少し、変わったろう…」

やつのことで身体を起こした白鬼が尋いた。

びんは唾を呑んだ。触るのもはばかりれる程、醜い。

「わしは…人というものを知りたくて…。お前の側にいたいと願ったのだよ」

白鬼は呟くように言った。

「我を通そうとして、とうとう派手に喧嘩をしてしまった」

「……」

白鬼の独白は、びんには分からない。

しかし、白鬼はたとえ聞き役がいなくとも、何か言葉にしないともしない様子で独言を続けた。

「おかげで主の逆鱗にふれた」

びんを見ようとかろうじて開けた白鬼の眼はひどく黄濁していたが、たたえる光は以前とそれほど変わったようには見えない。

「帰るところがなくなってしもうたよ」

自嘲のような笑みを浮かべる白鬼に、以前の尊大さはかけらもなかった。

ただ、ただ深く傷ついて、消え入りそうな存在がそこにあった。それを癒す術を見出せずに、苦しみもがいているように見えた。

びんの手が伸びた。うなだれる白鬼の心を癒すように自然に。

「いや、白鬼。前よりいい奴になったようだよ」

慰めではない。心のままの言葉だ。

びんがそういうと、白鬼は笑みを浮かべた。

それは不遜な笑みではなく、きれいで純粋な笑みだった。

* * *

「びん、お前というあの汚い奴は、なんじゃ」

託所の子供が半分怯え、半分責めるような口調で尋ねてくる。

白鬼は、びんの行くところ全てについてくる。

さすがに託所の中には頑として入れなかったが、昼夜問わず近辺を

徘徊しているため、村の者にはその姿が自然に目に入る。

白いぼろが片足を引きずりながら歩く様は、白い害虫が蠢いているようで、託所の子どもは気味悪がった。

「害はない……」

びんもどう言ったらいいのか決めあぐねる様子である。

あの日、白鬼が変わったのは姿だけではなかった。

この世から超絶していた存在は、まったく全てが“人”らしくなった。

白いぼろのような姿を見せて三日目、河原で白鬼が倒れていた。

「白鬼!？」

抱き起こすと、息も絶え絶えに。

「びん、わしは何やらおかしい」

「身体に力が入らぬ…頭が靄に包まれたようじゃ……」

そういつて震える手をびんに差し伸べる。

「白鬼……」

白鬼の枯れた枝のような手足と変形した顔面は、重篤な病を思い起こすに十分で、びんの心は重くなった。

その時。

神鳴りのような音があたりに響いた。夕立ちにはまだ早い刻だ。もう一度。

今度は出所がはっきりとわかった。

もう一度。

続けざまに白鬼の腹部から、その音が響いた。

「白鬼…」

びんは全身脱力感にさいなまれながら、指摘した。

「お前は…腹が減ってるんだよ」

「腹が減っている？」

———どうということだ、それは。

言わずとも顔に書いてある。

びんは嘆息して、白鬼をその場に転がして託所に帰った。

確か、薪集めの合間に拾った油含（ユガン）の実が袋にあったはずだ。

小さな木の実ながら腹もちのよい油含の実は、この季節あふれるほど森に実っている。

———がしかし。厳しい労働の隙をみながら採ったものを、こうも簡単に消費されるのは愉快ではない。

と、むさぼるように一気に袋を空にした白鬼の食い方をみて思う。

「うむ、満たされる」

空になった袋を惜しげもなく放ると、白鬼は突然、顔を川に突っ込んだ。

喉を二三回ならし、勢いよく飛沫を飛ばしながら水面から顔を上げると、開いた口が塞がらないびんに振り向いて呵々と笑った。

「水を身体に入れると、楽になるんじゃない？　びんよ、お前もやってみい」

どうやら水の飲み方は、一人で覚えたらしい。万歳。

以来、白鬼は腹が空くとびんに食べ物をせびりに来る。

「腹が減ったぞ、びん」

夕食を抜かれた晩に、そういつて白鬼が来た日には、さすがに殺意がわいたが。

* * *

暑いときには汗もかく。

蒸し暑い今の季節、汗と眼や皮膚から垂れる膿が混ざって、白鬼は尋常ならざる臭気を発した。

白鬼の体臭が耐えがたいため、びんは洗濯のついでにと白鬼を行水に誘った。

「身体を洗う？ なぜだ」

「…臭いからだ」

白鬼は自分の衣服に鼻を当てる。

「臭うか」

「臭い。誤魔化しようもなく臭い。腐臭がする」

びんは、にべもない。

白鬼の背中を流してやり、あとは好きにさせておきながら、びんは山と積んであるの衣類の洗濯にとりかかる。

白鬼は水を好んだ。

盛夏にも関わらず流れる水は手がかじかむほど冷たいが、まったく意に介しないらしい。下半身を浸して手で水と戯れている。

ふと、びんが目を上げると。水面の光が茫々と白鬼に集い、照らしていた。

あ、と思わず声をあげそうになる。

そこには、あの美しい白鬼の姿があった。

白い豊かな髪が水面に漂い、白いの横顔にまつ毛が長く影を落とす。筆で引いたように紅の唇が鮮やかだった。

白い衣は光をたたえて金色に、水面を叩く腕には珠色の鱗がつやつやと光る。

世離れた美しさに、びんは一時全てを忘れて心奪われた。

首を振り、瞬きすると、そこには短軀のしなびた白鬼がいた。

——幻影か…。

醜い白鬼はこちらを見ると、妙に愛想のある笑みを浮かべる。

「びん、ついでじゃ。わしの衣も洗っておけ」

——本当に。美しくても醜くても癩にさわる奴だ。

びんは白鬼を顔から水に叩きつけた。

四

「白鬼、人前には姿をさらすな」

「なぜ？」

「なぜ？毎日村で石を投げられる。毎日婆に罵倒される。あの婆の目を見たか？面倒背負いこみやがって俺とお前を殺さんばかりの勢いだぞ」

「はて。何も面倒はかけておらぬはずじゃが」

——俺にはかけている。

白鬼の圧倒的な醜さは、当然のごとく周囲から気味悪がられ嫌悪された。

村へ物を売りに行くときにも現れるものだから、びんを遠巻きに眺めるものはいても、近寄るものはいない。

品物は売れず、対価も手に入らない。

「醜さが、なぜいかん」

開き直るといつか、意に介さないといつか。

「白鬼」

びんは言い含めるようにゆっくりと口を開いた。

「お前は人を知りたいといったな」

白鬼は素直にうなずく。

「だったらまわりよく見る。まわりからよく学べ。そして賢さを身につける」

戦乱の中で、両親に言われた言葉だった。

「それが人の世を生きる術だ」

*

*

*

*

*

——子供として振る舞わせてあげられず、済まない。

戦乱で行き場を失い、流民となって村へ流れ着いた時。両親はびんに頭を下げた。

びんは両親の拳動にどうしてよいか分からず、ひたすら押し黙った。
「だがな」

沈黙の中、父は下げていた頭を上げると、真っ直ぐな目で幼いびんにこう言った。

身の不遇を時代のせいにしても何も好転しない。

ただ生き抜けば、いずれ平和が訪れる日が来る。

作物が畑に豊かに実り、温かい家に家族が集い、子供が笑って育つ時代がきつと来よう。

その日のために、耐えなさい。賢くなりなさい。
ずるくても、格好が悪くてもよい。柔軟に強く。
ただその日まで、生き抜きなさい…

繰り返しびんに言い聞かせた両親は、生き抜けなかった。

それは、びんを生かすため。

びんに食べ物と衣類を優先して与えるため。

ひもじさは我慢した。

寒さも我慢した。

けれど両親を亡くし、一人きりになったことは耐えられなかった。
自分以外に何も無い。

孤独というものの恐ろしさときたら。

大切な両親の教えを破って、いつそ死んでしまいたいと何度も思った。

「お前がいなくなっても誰も気づかぬよ」

託所で初めて過ごす夜に婆に言われた言葉は、ここでも孤独が続くことをはつきりと示した。

「帰るところがない」

白鬼は言う。

「帰るところがない」

びんも言いたい。

欲しいものはただ一つ。

自分の存在を、大切に思ってくれる人が、

欲しかった。

* * *

村の大通りの雑踏の中。何かを乞うように切実な目をして虚空を見つめるびん。

白鬼はその様子をしばらく傍らで見ていたが、何か自分の内で得心がいったように一つ頷くと、静かに立ち去った。

その日は品がよく売れた。
いい気分だった。空の籠と懷の錢を渡したら、婆の怒りはおさまる
だろう。

心に余裕ができると、ふと、白鬼のことが気になった。

「帰るところがない」

途方に暮れた体でいつも言う白鬼。

「びんがわしの家じゃからな」

屈託なく笑う白鬼。

——ああ、どうして。

俺は白鬼を放っておけないのか。

「白鬼」

黄昏の森の中にびんの高い声がこだまする。手には油含の実がたん
まりと入った袋。

「白鬼、どこにいる」

——帰るところがない。

白鬼の声が頭に響く。

なんとなく胸が痛んだ。

「どこだ」

河原にも。窪地にも。姿がない。

「どこだ」

白鬼の存在は決して歓迎するべきものではなかったはずだ。
自分にとって手間ばかりかかる、迷惑極まりない存在。
そのはずなのに…。

なのに、白鬼がいなくなったらと想像した時のこの気の塞ぎようは
何だ。

後悔なのか、焦燥なのか、それとも絶望なのか。

顔から血の気が引いて行くのがはつきりとわかる。

速足で森を駆け抜け抜けると、草でむき出しの足が薄く切れた。

「どこだ」

「どこだ」

「白鬼どこだ」

*

*

*

*

*

何度呼んだだろう。

「ここじゃ」

足元から声がした。

大樹の根元に身体を横たえていた白鬼が、のんびりと根の枕から頭
を起こした。

午睡をしていたらしい。びんの目の前で大欠伸をした。

びんはその場に座り込み、まだ荒い息を必死に押し込めた。

——まったく、自分が阿保みたいだ。

怨みがましく、睨めつけた。

「びんや。わしはずっと…」

対する白鬼は、びんの様子など目に入らないようで。

普段のままに鷹揚に口を開いた。

「おぬしにいわれたことを、考えていた。一つだけ得心がいかなのじゃ。答えてくれるか？」

——なんだ。

少々の怒りを込めて、目だけで問いを返す。

「びんはわしが邪魔だという。しかしなぜ、びんはわしを放らんのじゃ？」

先ほどの自問と同じ問い。

しかし答えは、でていない。

「俺の助けがなければ、お前は生きていけるのか？」
びんに問い返されて。

そんなことは、考えたこともない。と白鬼は素直に考え込んだ。

その無邪気さを、びんは笑う。

「お前が死んだら、」

見殺しにしたまなの顔が浮かぶ。

「目覚めが悪い」

——それだけか？

繰り返す自問。

「それだけだ」

自分に言い聞かせるようにそう言った。

*

*

*

*

*

「びん、わしは今日一つ人から学んだぞ」

しばらく沈黙があつたが、ふいに白鬼が切り出した。

怪訝そうにするびんに、白鬼は「お前がわしに教えたんだろうに……」
と少し残念そうな顔をする。良く教えを守つたと、褒めてもらいたかつたらしい。

が、すぐに氣を取り直して「村ではな、」と続ける。

「一つ品物をやるたびに、一つ何かを返していた」
とりあえず、一つ頷いておく。

白鬼は市の人々のやりとりでも見ていたのだろうか。

「与えられたものに、与え返す。それが人の世を生きる一つの決め
ごとなのだろう？」

それは、正しくもあり、正しくなくもある。

「お前はわしにたくさん与えてくれたから、その代わりにお前の欲
しがっているものを返さなければならぬんだな」

びんが警戒する間も、はねのける間もなかった。

次の瞬間にはびんは白鬼の腕の中にいた。細い腕に、しっかりと抱
きすくめられていた。

——なんで。わかるんだ。

欲しいものは、包み込んでくれる存在だと。

——義務感で抱かれても、何もうれしくない。

積み重なった不信と、ひねくれた気持ちがそう思わせるのだが。
けれど文句は口には出なかった。

白鬼の腕の中は、びんが心安らぐほどに温かったから。

誤解のある解釈を正したり、心を知られたことへの疑念だったり、
照れ隠しだったり。

白鬼に言いたいことは山ほどある。

——けれどこれはこれで悪くない。

だから、何も言わないことにする。

五

市の日だった。村の大通りの左右には莫蔭が敷かれ、即席の店が並ぶ。

夏の日差しが照りつけるなか、通りは行き交う人で活気づく。びんも端に座をかまえ、託所の子どもが編んだ藁靴を並べた。

「来るなつて」

暑さと白鬼のしつこさでうんざりとした声をあげる。

あまりにも聞きわけがないから、もう口に出すのも馬鹿らしい。しかし、今日はちつとも物が売れない…。

「こいつだ」

通りがかりの農夫が傍らで大きな声を上げた。

周りから視線が集まる。農夫の指し示す先には、白鬼の姿。

「畑の作物を盗んでいった、コソ泥野郎めが」

見る間に農夫の顔色が怒りによってどす黒く変わる。

びんはその言葉に眼を剥く。

「白鬼、お前！」

「油含の実だけでは腹が減るでな」

しれつと返す、白鬼。

「与えられたら返すことを学んだだろう。一方的にものをとるのは、盗という重罪だぞ」

「だから、今返す」

「煩いな」とびんを一瞥し、白鬼はごくごく穏やかに立ち上がって、いきり立った農夫に対峙した。

「おめえ、畑の作物を盗んだやつがどんな目に遭うかわかってるん

だろうな」

今にも殴りかからんばかりの農夫の左手を、驚くべき早さで白鬼が握った。

「お主…思うように手先が動かぬのではないか」

「は？」

農夫は予期せぬ白鬼の行動に面喰って、自分の左手に視線を移す。

「そうじゃろ」

白鬼は口元をゆがませると——決してそうは見えないが、これが白鬼の笑顔だった——、呼吸を整えて目を閉じた。

あたりの空気が一瞬にして白鬼に集う。ぐっと何かに全身を籠められるような感覚に襲われ、びんはすこし息苦しさを感じた。

——まただ。

また、あの美しい鬼が戻ってきた。

深く澄んだ濃紺の瞳が、農夫の左手をじっと注視する。

白鬼の周りに光が集まり、その姿自体が光源となったように茫々と揺れる。

農夫にも同じ光景が見えているらしい。呆気にとられて、ただ口を開けている。

「動かしてみい」

醜い白鬼は、促した。

「手を」

焦れたように、動かない農夫を促す。

「もう、閉じれるはずじゃ」

恐る恐るといった状態で、えつは左手を静かに握った。

「えつ、どうした？」

別の農夫に名を呼ばれて、えつは我に返る。

「……………」

無言のまま、えつは今おきた奇跡を確かめる。

手のひらを開いて…閉じて。開いて。今度は親指から順に指を折っていく。

指を曲げることも難く、手袋をはめているように感覚の鈍くなっていた手先が意のままに動くことを何度も確かめる。

「おめえ、…神様か」

えつは、うわずった驚嘆の声をあげた。

その目には涙がにじんでいる。

これで次の冬には、籐の籠編みの副業も再開できる。家族に少しましな生活をさせてやれる。少なくとも、薪を切らして子供を凍え死にさせるような心配はなくなった。

「ありがてえ。ありがてえよ」

「これでお相子じゃ。そうじゃろ?」

盗人にしては少し態度がでない、とびんは思ったが。

えつは過去の怒りよりも感謝の意が勝つたらしく、首を縦に何度も振った。

*

*

*

*

*

瞬く間に噂は広がった。

「醜薬師^{しうくすり}」

村ではその呼称が定着し、白鬼の治療術は評判になった。病に侵されたもの、眼の見えぬもの、足の悪いもの。果ては家畜の類まで。

「天寿じゃ」

と言われた老人以外は治らぬものはなかった。

不思議なもので、外見の醜悪さも彼の成す奇跡の前には全く意に介されなくなっていた。

それどころか、白鬼が市に立つ日は、びんの店の景気がすこぶる良い。

「不思議不思議。人とは不思議」

節をつけて唄う白鬼はたいそう機嫌がよい。

感謝の意なのか、白鬼の治癒で病から解放された者たちがひっきりなしに託所の前に物が置かれるようになった。

食べ物、反物、水差しや鍬。子供が置いていくのか手製の風車、なんて時もある。

「おお、奉られとるのお」

そう言つて白鬼は嬉々として貢物を両手いっぱい抱えて森へ帰る。

驚くべき量をもつていくのだが、余らせている様子はない。

それでもまだまだふんだんにあるので、託所は衣食に不自由なくなつた。

「悪かない」

白鬼の存在について、婆も何も言わなくなつた。

*

*

*

*

*

夜中に託所の戸が乱暴に叩かれた。

「うるせえ。いま何時だと思つてゐる」

婆がだみ声で怒鳴る。

「びんは…醜薬師はいねえか」

白鬼が、つねにびんの傍らにいることは周知の事実だった。

白鬼の居る場所を人々はほかに知らなかったし、たまたま白鬼一人で行き会ったものがいくら治癒を懇願しても、白鬼は頑として聞き入れなかった。

びんからの頼みでなければ聞かなかった。

だから治癒の術を望む人はまず、びんに伺いをたてに来る。

婆に文字通り叩き起こされてしぶしぶと門から出たびんに、人影が飛びついた。

「村長さまとこの孫娘のみやが、急転の病に罹ったんだよ」

村長の家の使用人らしい、まだ少年といってもいい年頃の小柄な男は必死の形相だった。

「今は夜だ。白鬼を休ませたい」

びんは眉をしかめた。

ここのところ途切れることなく依頼が来る。昼間は以前のようにふらりと過ごす時間もなくなっていた。せめて夜は休ませてやりたい。「手ぶらで戻ったら、俺は…なあわかるだろ？」

男は哀れな声音で乞うた。

「急転なんだ。今見てもらわなければ、あつという間にだめになっちまう」

急転の病とは、この国の人に恐れられる原因不明の死の病である。

一日目に高熱と、独特の紅色の発疹が全身を覆い、二日目にはそれが跡形もなくきれいに消える。しかし、三日目に再び発疹ができる、そこから容体は急激に悪化する。再び襲う高熱に意識を失い、それから三日のうちに死を迎える。

罹ったもので、再び意識を取り戻すものは、百に一とも言われている。

村長の孫みやは、今年七つになる愛らしい少女だった。

なぜかひどく白鬼に懷いて、白鬼が村に姿を見せると露骨に嫌がる母親の手を振り切って駆けつける。

「こんにちは。くすしさま。みやからのおくりものよ」

にこにこ邪気なく笑う、その手にはいつも白鬼へ送るための油含の実が何粒か握られていた。

「おお、ありがたい」

少女から実を受け取る時、白鬼は珍しく顔いっぱい破顔するのだった（とうてい笑顔には見えないが）。

びんは嘆息した。

ここで白鬼を呼ばなければ、確実に少女は死に至る。

死にゆく人を前にして、見殺しにできるか？

ああ、できない。

意を決して、びんは文を唱える。

数多の芥は漂い

滂沱の涙は流る

数多の人々の様

纏るる綾系の如く

この世の理はそれなお混沌

どのくらいの間があっただろうか。

白鬼を、びんは待った。

——来ないほうがいい。

心の片隅でほんの少しだけ、そう思う。

白鬼の手に掛かったものが快気する度に、新たな白鬼の噂を耳にする。

白鬼の存在を知るものが、増える。

その事実が、なぜこつも不安をもたらすのか。

なにか、嫌な予感がするのだ。

白いぼろは律義に現れた。

「びん、わしはその文が一等好きじゃ…」

夜半過ぎの招集に、さすがに惴然とした様子だ。

「が、夜は寝るためにある。そして今、わしは眠い」

二人の予想をはるかに超えて、白鬼を求める声は大きくなっている。

痩せた肩をすぼめて、済まなそうにするびんに、白鬼はそれ以上何も言わなかった。

「みやが病に倒れたらしい」

上目遣いにびんが白鬼を見やる。

「行ってくれるか…？」

白鬼は頷いた。

「行こうとも。あの子には油含を与えられた恩があるからな」

*

*

*

*

*

「醜薬師にも無理だわい」

「急転の病は罹つたら最後、三晩のうちに皆ころりと死ぬ。それでしまいだよ」

隣の部屋で誰かがささやきを交わしている。

裏戸から使用人に導かれて屋内へ入った白鬼は、躊躇なく童女の元へ歩を進めた。

母親は看病の疲れか、娘の枕元でうとうととまどろんでいる。

「見せてくれ」

「ひっ」

白鬼の顔を間近に見て、童女の母は思わず悲鳴をあげた。

「静かにせい」

白鬼はみやの手首、胸部、頸部を順に触り、額に手を当てながら言つた。

居丈高な口調だけは以前と変わらない。

「ど、どうなんだ、醜薬師」

バタバタと室内に入ってきた村長が、掴みかかるようにして尋ねる。

白鬼は一瞥もくれず、みやの額に手を当てたままだ。

しばらく沈黙があつた。

というより、その場にいたものは呆氣にとられて口をきけなかつた。そこには、醜薬師とは似ても似つかない白い麗人が佇んでいたのだから。

——ああ、また。

一人、免疫のあるびんは格別驚くこともない。

ただ、その端正な横顔を見て考えていた。今まで不思議と気に留めなかつた事柄を。

——白鬼は、いったい何者なのか。

一つ長く吐息をつく、ようやく白鬼は目を伏せてみyaを見つめていた白い面をあげた。

「…回生の相がでておる。この子は助かるよ」

紅い唇がそう告げると、村長は目の前の者がいったい何者であれ、どうでもよくなったらしい。白鬼の手をとって何度も頭を下げた。翌朝、みyaは眼を開けた。

高熱で少し衰えてはいたが、再び眠りについたその呼吸は、周りの者が峠は越えたと確信するに十分なほど穏やかだった。

* * *

白鬼が急転の病を治癒したとの噂は、その日のうちに郡境まで駆け巡った。

「まさか急転の病まで治すとは」

から発して、終いには

「死者まで蘇らせるということだぞ」

という話にまで。

「あの子はたまたま回生の相がでておったからのう。どうにもできぬ天寿はあるのじゃがな」

囁かれる飛躍した噂話に、白鬼は苦笑した。

安穩と構える白鬼を余所に、びんの胸中はずいぶん波立っていた。

白鬼を連れていかないでくれ。

びんはただ平穩に暮らせればよかった。

なにか、嫌な予感がするのだ。

「お前が嫌というならば、わしは誰も助けんぞ」

白鬼が、いたわるようにびんの肩に手をかけた。

——口に出していないことを、なぜわかる。

びんは苦々しく思った。感情が筒抜けだ。白鬼の眼がびんの心中をしかと見ているとしか思えない。

白鬼が治癒の術を使うことを「嫌だ」と言う理由はどこにもなかった。

「人の求めに応じるのはなかなか興がある」と白鬼は嬉々として治癒を行うし、そのために何かを犠牲にしているわけでもないのだから。

けれど人が集えば集うほど。遠くから来れば来るほどに、何か不安が増していく。

ただそんな漠然とした杞憂で、目の前にいる苦しんでいる人間を救うのをやめろということは。

——できるわけがない。

「お前が今に満足しているならば、俺はそれが一番いい」

びんが白鬼に言ったそれは、嘘ではない。もうひとつの本心。

＊

＊

＊

＊

＊

白鬼は人のそういうまだるっこしい感情をいつも不思議に思う。

自分の心を押し込めて、他人を優先する。

その行為はとうてい理解できなかった。理解できないが、それに触れると心地よいし、嫌いではない。

鋭利な刃のように、心をえぐる冷やかさをもつ半面、心地よい温かさも人はもっている。その感情の心地よさを教えてくれるびんは、大切な存在であった。

今、白鬼にとつてびんは無二の存在であった。

「お前はわしの縁よすがだよ」

白鬼がそう言うと、びんの眼は揺れた。

しかし、びんは。

「俺も、そうだ」とは、言えなかった。

白鬼を特別な存在と認めたら、求めていた大切なものが手にはいる。同時に大切なものをいずれ失うこともまた覚悟しなければならぬ。

——手に入れて失うならば、最初からもたないほうがましだ。

血を吐くほどに欲していたものが目の前にある。手を伸ばせば、手に入る。

けれど、手を伸ばしたらそれは幻として粉微塵になってしまうのではないか。

それが怖くて、手を伸ばせない。

びんは俯いた。

———
なにか、嫌な予感がするのだ。

白鬼の風聞は、留まるところを知らない。

六

託所にはひっきりなしに人が訪れる。

その喧騒に少し倦むと、ふたりはいつも連れ立って河原に抜け出した。

「水がないのぉ…」

川の水量は、以前に比べ格段に少なかった。

びんの背丈にも届かない川幅に流れる水はくるぶしがやっと隠れるほどで、川の音はチロチロと頼りない声をあげていた。

初夏の豪雨以来、一月以上も降雨がない。

この国全土が大変な干に襲われていると、行商の親爺から漏れ聞いたのは昨日のことだ。

村の井戸が少しずつ水位を下けているのを憂える声も聞こえていた。周囲の畑の作物も、連日の酷暑に葉が茶色く焼けて燃えあがらんばかりだ。

市に入る品も、人も徐々に減っている。

「都じゃあ、熱症や飢餓で死者も出始めているらしい」

「戦で国庫の備蓄は使い果たしているからな」

皮肉を交えて笑い、親爺は肩をすくめた。

「道中も悲惨な地域がずいぶんあったな」

累々と横たわる死体。倒れた親の隣で赤子が泣き、老いた両親は野に放られる。

カラスが肉片をついばみ、遺骸はあつという間に蛆の巣窟になる。

埋葬が追いつかなければ、この暑さで腐敗が進み、疫病も流行するだろう。

戦が終わってまだ一年だ。

なのに、あの光景がまた蘇るといふのだろうか。

息が苦しくなった。

自分ではどうにもできない状況下で、それでももがくように前に進むしかない苦しさ。

助けを求めるように横を見ると、いつになく苦い表情で白鬼が佇んでいた。

初めてびんに見せる表情。

その頬を、つ、と一筋の涙が伝った。

姿を醜く変え、食べるものに三日ありつけなくとも。「帰るところがない」と、幾度となく口にしても。村人に蔑まれ、罵倒され、投げられた石で額を切つても。

決して涙は見たことがないのに。

——白鬼。お前はなにが苦しい？

喉まで出かかった問いを、沈痛な面持ちで黙す白鬼になげることができなかった。

はらはらと落ちる涙を拭わずに。

彼方を見つめる白鬼には、底知れぬ深い悲しみが漂っていた。

*

*

*

*

*

雨のない真夏の酷暑も、あたりが闇に覆われて星星の微かな明かり

が地を照らすころには、ほんの少し身をひそめる。

託所の暗い堂に、身を寄せるようにして蹲る子供たちがいた。開かれた戸から顔をのぞかせる欠けた月が、子供たちの寝顔を薄く照らし出した。

白鬼は静かに枕元にたつて、幼さの残るびんの寝顔を見つめた。

――父に似ている。

切れ長の澄んだ瞳も。くせのない漆黒の髪も。立ち姿も。

心の内を読もうとまっすぐにこちらを見つめる癖も、わかりやすく感情が面に出る様も。

危ういまでの性根の優しさや頑なさも。

びん枕元にたつた白鬼は回顧した。

*

*

*

*

*

“磬”は、頼みもしないのにそつと解放の文を告げて、自らはその身分を捨てた。

「互いに、何かに縛り付けられる生は不要だろう」

一片の未練もなさそうに、特上の絹で仕立てた褐色の襟のついた黒い衣を脱ぎ捨てた。

「誰のためでもないこの生だ、好きに生きようぞ」

磬は言った。

しかし白鬼は解放されたことに格別の思いはなかった。

「わしはお前に仕えるのは悪くないと思っておるが」

自らの意思に反してしたくないことをするのは、人だけだ。

盤は白鬼の内心をはかるように、じつと見つめ、

「主の意には背きたいくせに？」

と、いたずらっぽい黒眼で笑った。

「私のもとにいることは、貴方を彼の地に縛り付けることになる」

そう指摘されて初めて白鬼は気づいた。

あまりにも当然で、それを变えることなど到底思いつかなかったことに。

一番大きな“自らの意思に反すること”を。

確かに、彼の地にいることは自分の安らぎではなかった。むしろ、苦痛だった。

白鬼は彼の地で、束縛されることの恐ろしさを初めて知った。

彼の地では、美しい衣を身につけていた。色鮮やかな絹を幾重にも重ね、表に見える打ち掛けは複雑な紋の細部まで金糸の刺繍が施してある。

見事な装飾品。白牙を微小な椿花形に彫り込んだ耳飾り。首の金細工には一節毎に紅珊瑚の珠が埋め込まれ、腕には精細な金環が十数も渡る。

主の寵愛を受け、求めるものは何でも手に入る。この身の自由以外は。

いつも思っていた。

「帰りたい」と。

彼の地には風の勁さが無い。土の堅さが無い。火の激しさも水の豊かさもない。膚にふれるものはふわふわと柔らかく、なにもかもが調和していて安定している。

この虚構から、抜け出したい。

愚かだった。上に昇ればすべてが満たされると思っていた。

しかしすぐに分かった。

——人の地に据わり、人と共に生きていた日々のなんと輝いていたことか。

そう気づいた時には遅かった。

もう、下ることはできない。

帰ることが、怖い。

「さあ、何なりと好きなところへいけ、いけ」

流紋の刺青をした手が印を結び、盤と白鬼との最後の絆を断ち切った。

この解放は怖い。

人の世へ下るという選択をしない限り、白鬼の真の解放は決して得られないのだから。

そして、白鬼にはその選択をすることができない。

堕ちるものの末路はただ一つ。それが怖い。

だから、人の地での盤という縁を失ったら、彼の地に戻るしか選択肢がない。

解放されても、帰るところがないとは言えなかった。

盤はともうれしそうだったから。

翌朝には盤の失踪は大事になったが、それから先のことは白鬼は知らない。

白鬼は、自ら再び束縛の元へと帰った。

*

*

*

*

*

「お前を縛する文は、もう誰も知らん」
だから好きにするがいい。
解放の時に、盤は言った。

——嘘をつけ。

すっかりお前の息子が覚えているではないか。

——だが、悪い気はせんよ。

もしかしたら盤は、本当は帰るところのない白鬼の気持ちに気づいていたのかもしれない。
それで、救いの道を一つ残した。

——盤よ。

彼の地を捨てる決心がついたのは、お前の息子がわしの人の世での支えとなってくれたからだ。
縁を与えてくれたびんには、この身を与えてもまだ足りないくらいの恩を感じている。
与えられた恩には報いよう。
それが身の破滅を誘うとも。

——そう、それもまた、一興。

白鬼はこれから訪れるであろう、未来への予感を笑った。

白鬼の去った後には、辛い現実からしばし離れて夢の中で遊ぶ子供たちの、規則正しい寝息が聞こえるばかり。
夜は静かに更け、やがて暁の時が訪れる。

七

託所に来訪者があつた。

黒装束の集団。長身ながらもしなやかな身のこなし。長い髪を総髪に結え、帯刀している。都の宮に仕える衛士たちだ。

そしてその中央にいる黒い切り下げ髪の女。

黒衣に褐色の襟。突き出た手に描かれる流紋。それが意味する者はこの国に住む者ならわかる。

「びんはおるかえ？」

婆がひれ伏した。

女の職は神仕。朝廷にあがり、帝に見えることを許される術師として、唯一の身分である。

神に仕え、人の世に益をもたらすことのできる者を術師と呼ぶ。森羅万象を掌る神々と交渉を行い、人間の願いを伝え、また、人間に神の意思を伝える。

術師の中で特別に認められて宮にあがり、国の代弁者として神々と交渉をもつことのできる者が神仕である。

神仕たちはそれだけ大きな力をもつ者であるから、国の輔けになる半面、国の脅威にもなりうる。諸刃の剣として、神仕たちは宮中で丁重な扱いを受けつつ、その一挙手一投足は常に厳しい監視下に置かれていた。

この国に片手で数えるほどしかない身分。その直々の来訪を受けて、婆は腰を抜かさんばかりだった。

即座にびんが呼ばれた。

堂の入り口から向かった正面に、神仕の女が一人で坐していた。美しい女だった。

しわのないきめ細やかな肌は大層若く見えるが、醸し出す雰囲気は随分に老成していて、老年の口のようにすら見える。

坐しているその場はいかにも粗末なあばら家然としている堂だったが、まるでここが宮の一角ではないかと錯覚させるような気品があった。

「……」

伏礼の仕方など知らない。どう接してよいのかわからず、女まで数歩のところで直立した。

神仕の女はびんの態度を咎めることはなかった。

「民の囁く噂は耳にしておる」

おもむろに、びんに対して人を介せず直接口をきいた。

「そちがまさしくびんか」

「……はい」

「父の名は」

「はん」

「……古字の名をもっていたな？」

びんは是と頷いた。

父が古字と呼ぶ奇妙な文字を地に書いたのは、びんの名に今様の文字ではない字が当てられていることを教えてくれた日だった。

「お父の故郷の、古い時代からの慣習だ」と父は言っていた。大切な慣習なんだ。と。

その割に、父から故郷の話聞いたことは一度もなかったのだけだ。

「大切にしなさい。そして、決して口外してはならない」

これは、神に通じる言葉なのだから。そう信じられているのだから。商業でさかえた新興の都市、栄育ちのびんにとっては神や術師は縁遠い存在だったが、

——神に通じる言葉なのだから。

父の真剣な眼差しにその言葉を笑うことはできなかった。

冗談は大層好きでも、嘘はついたことのない父。

「一画たりとも間違えてはいけない」

普段はその面に笑みを絶やした事のない父が、その日は幼いびんが間違わずにその字を覚えるまでと、一笑もせず何百回も書写させた。

古字については、怖いほどに真剣で神経質な父だった。

「やはり、か…」

女は独りごちるとびんへ目を向けた。強い意志が現れるつやつやと黒い瞳。

その目が、切迫した状況を物語る。

「びん、そなたに父は…はんはなにかを残したか？」

びんは、問いの意図を汲めずに首を傾けた。

目の前の女と父とに、なんの由縁があるのだろうか。

女は自分が急いていることを自嘲し、「名乗りもせず済まない」と詫びた。

女が改めてすつと背を正し、正面を見据えると場の空気が一層引きしまった。

「私は、清成帝に仕える神仕、第一席のさえと申す」

清成とは常平の今帝。第一席ということは宮中の神仕たちを束ねるトップということの意味する。

神仕の位は、力量のみで決すると聞く。ということはこのさえという女は非常に大きな力をもった術師なのだろう。

「この位は十二年前、」

女はびんを見据える。

「そなたの父から継いだものだ」

八

「うそだ……」

長い沈黙の後にやっと一言、発した。二の句が継げない。

——そんなバカみたいな話があるか。

父は、秀麗な気品のある顔立ちをしていた。抜けるように白い肌は炎天下の作業でも陽に焼けず、その外見は確かに周りから浮いていた。

しかし内実は陽気で冗談と酒が好きな貧民街の労働者そのものだった。

戦が始まるまでは米には仕事があふれていたが、日雇いの労働は厳しい労働に対してわずかな賃金。親子三人、その日の食にも事欠き住居を転々とする日々だったのだ。

——絶対的な地位をもつ神仕が、なんで刻苦の労働に耐え、戦乱に巻き込まれて、飢えて野垂れ死にする必要がある？

「はんはそなたには何も話さなかったのだな。だが、生憎と嘘ではない」

さえは視線を下に落とした。何を思っているのか。表情は読み取れない。

「そなたの父は譬。今の世に古字の名をもつ者は神仕だけじゃ」

そのことが今の話が偽りではないという裏付であるように、さえは明瞭に声を張った。

「譬は、幼い時から目に留められた優秀な神仕だったよ」
びんの感情などはお構いなしにさえは淡々と語る。

「成人の儀のその日に水門番を司る水神を縛し、この国に安定した降雨をもたらした」

それは清成帝の即位の頃。

常平は清成帝即位の後に急激に豊かになった。その一因として安定した食糧の供給が得られるようになったことは大きい。元来、農作を行う平地は雨季の気まぐれな降雨による水害に悩まされ続け、豊作不作の定まらない国であったから。

その急激な発展がこの国にいらぬ欲をもたせたといえそうなる。先の戦の発端は興国のとめどない欲から起こったものだから。

「だが十二年前。勝手に水神を解放し、自らは召喚の文も残さずに消えた」

その声音は、少しの憐憫と、憧憬と…そして大きな怒りを交えて。

「“逃”という神仕として最大の禁を犯してな。国境を封鎖し、手を尽くしたがとうとうつかまらなんだわ」
そうして。

「水神は我らが手から離れ、この国は再び気まぐれな降雨による天災に見舞われるようになった」

さえが口をつぐむと、二人きりの空間から音が消えた。
沈黙に耐えかねるように空気だけが鳴った。

*

*

*

*

*

沈黙の間、さえはびんを凝視していた。

びんの周りに、青い靄が天に向かって昇るように薄く、ごく薄くかかっていた。

いまにも消え入りそうなその靄を認めると、さえは少しばかり目を見開いた。

「そなた、は」

間をおいて開いた口は乾いていて、舌が張りついた。

「生まれながらに術師の才をもっておるようじゃ。強い気をもっている」

青い靄はさらに薄く、あたりに溶け込みそうな気配。

「何も教わずに水神をそばに侍らす者がおるとはな…驚いた」

神を縛るのは、第一席の神仕でも容易にできることではない。現に、一度も縛したことのないまま第一席の任期を全うする者もいる。それを、この少年は。天賦の才のみでやってのけるのだ。

「水神…？」

「お前のそばに、ほんの微かに気が漂っておる」

さえは、すう、とびんの輪郭をなぞる様に指をうごかした。

「間違いようもない水神の気だよ。しかしその気の薄さはなんじゃ？」

——気づいておらなんだか？

さえは怪訝そうに眉をひそめた。

神を寄せておいて、気づかぬとはどういうわけか？

「びん、そなたにはんはなにかを残したである？」

再び繰り返す、問い。

「そうでなければ、水神がここにおるはずなかるうて」

——水神？俺のそばに？

そんなものはいない。いるのはあの白鬼だけ。

「お父には、文…を教えてもらった」

「それは、水神を召喚する文であるはずだ」
さえは断言する。

——そんなはずはない。

これを唱えてもくるのは、白鬼だけ…
白鬼しか現れない。

けれど。

けれど、白鬼は必ず現れる。

*

*

*

*

*

数刻の後、さえはびんを残して堂を出た。入るときには高かった陽
が傾きかけている。

黒の衛士たちが恭しく出迎える。

結局、びんは父に教わったという文を頑として口に出さなかった。

——何、力づくで文を吐かせるまでよ。

翌朝にはびんを都に連行する手筈が整っている。

手前の宿場まで引き返そうと、馬に跨ろうとした。その時。
「訝」

その後姿を呼び止めたのは、白鬼だった。

「久しいな」

「…造作ない。自ら出てきおったか」

気軽く挨拶をする白鬼の声を聞き、さえは口の端で笑った。

「やはりびんの文に寄せられていたな、水神よ」

そういつて振り向き、眉をあげる。

以前とはまったく異なる、その醜悪な面構えをじっと見つめた。

「そなた…堕ちたのか」

「逃げた」

一言。

「つい一月ばかり前のことじゃ」

さえは合点のいったような顔をした。

「どうりで」

皮肉を込めた、なじるような声音。

「よくぬけぬけと人の地にいられるものじゃな。厚顔にもほどがある」

さえは黒衣の者たちに手を振り、下がらせた。

「そなたのせいで多くの民が苦しんでおるというに」

白鬼の、瘤の奥で小さく光る目が揺れた。さえの発言は白鬼の心に波風を立たせた。

——せいぜい苦しむがいい。

さえに同情心はない。

——自らの行動がおこした結果を見て、苦しめ。

「主は…そなたを奪ったこの地を憎んでおるのだろつ。一月前にそなたが堕ちたというが…それ以来一雨も降らせんでな。願立しても、こちらの詞に一つも耳を傾けん」

天災を御せずに、帝に叱責を受けるのは第一席のさえだ。

「その結果の干だ。水神は動かず、対して主は道理にのっとって陽を動かすものだから、この夏の陽に畑の作物は燃えあがりそうじゃ」そしてこの度の干は甚だ被害が大きすぎた。その咎は叱責では済まされそうにもない。

悔しいと思う。力のなさというに、目の前の事態に手の打ちようもない。

——逃げた男に、いつまでも追いつけぬ。

自分のふがいなさに何度齒がみしたか。

さえの苛立ちは、目前の者に向けられる。

——涙を流すか？

短絡的だったと後悔しているか？ ならば端から、主からの自由なと求めるな。

白鬼の流す涙にも、さえの苛立ちは募るばかりだった。

「自らのしたことを悔いる暇があれば、主に乞いに行け。降雨を、と」

白鬼は押し黙ったまま。

自身のしたことに後悔はなかったが、目の前の自由を求める気持ちに駆られて、その結果を予期していなかったことも事実。

自分に“形壊”と“化人”の罰を下したことで、すべてが終わると思っていた浅はかさ。

だから、自らが招いた事態を人の噂に聞いて、果たしてこれでよかったのかと思う。

「そなたに彼の地へ渡れと命じるように彼の少年に仕向けよ」
さえの口調は有無を言わさぬ強いものだった。

「水神よ」

恐ろしく冷めた、氷のような眼をして女は言った。

「この呼応に応じなければ、かの少年の末路はわかっておるうな」
弱みを効果的に使った、脅し。

「この世にも彼の地にもたっぷり縛られたお前なら、わかるだろう。
お前がいくら逃げようと。帝の命は絶対じゃ」

はんも、さえも、同じ束縛に耐え、そしてはんは逃げた。

逃げたと同時に、はんは未来を捨てたも同然だった。帝に逆らうものの運命はただ一つ。

「選択の余地はない。命には応で答える、否はない」

水神に降雨を命じぬ限り、びんは極刑に処されるだろう。

九

一人、堂に残されて。
びんは虚空を見つめた。

刻を少しさかのぼる。

「文は言えぬ、と？」

相對する少年に“否”という不意打ちを食らって、さえは思わず声を荒げた。

「なぜだ」

「水神は、来ない」

「唱えれば、必ず来るはずじゃ。そなたにはその力がある」

「白鬼はっ」

びんはさえに負けじと語気を強くした。

確かに、出会いの時から浮世離れた存在だった。水神だと言われれば、いくつも領けることはある。

だが、どうしても…肯定できない。

白鬼が自ら名乗るまでは、白鬼は、白鬼だ。

「水神ではない」

「ふざけるな」

間髪置かず、さえは言った。

それほど大きくはないが、あたりを気迫で叩きつけるような声だった。

「もとはといえば」

吐き捨てるように。

「お前の父がすべて元凶なんだぞ」

あの一見豪奢で丁重な、しかし自由のない灰色の世界に。
だれもが耐えていたのではないか。

それを一人勝手に抜け出して。

「憎い、憎い。憎くてしかたない。一人逃げやがって」

さえの本心は、自制心という殻で何重にも覆われていた。
その殻がとうとう割れて、さえは溢れる感情にひどく取り乱していた。

想像以上にこの女は若いのだ。とびんは思った。

「力があり、帝に信を置かれ、だれよりも重く扱われたというに」

——本当は、私の方が、逃げたかった。

さえは憎しみのすべてを、びんへぶつける。

「子であるお前が償うべきじゃ。さあ呼べ。そして再び天に上がり、
降雨を乞えと」

「嫌」

「水神のために、幾万の民を捨てるか」

女の言っていることは正しい。

それがごくごく自然なのだ。

独我の願望と、多数の人命は、天秤に掛けるまでもなく後者をとる
べきなのだから。

けれど、白鬼はずっと。

「帰るところがない」と言っていた。

この地でどんなにみじめな思いをしても、天へは帰らぬという固い意志。

天はそれほどまでに白鬼にとって心安らがぬ地であったのだろう。

そこに白鬼が否と言わぬをいいことに、遣うことは…できない。

そして。

一度、手放したが最後。白鬼はこの手に戻ってくることはない。
そんな予感がした。

「できません」

さえの顔に、はつきりと侮蔑の色が浮かんだ。

——愚かな。

口には出さずとも、表情からありありと見てとれる。

「明日には、お前を都へ連れていく」

「三日の内に吐かねば、死よりも酷い目を見ることになるぞ」
脅しではなかった。

都へ行けば、死よりも酷い目にきつと会うのだろう。

——なんのための意地なのか。
自分でもわからない。

*

*

*

*

*

「びん」

夜も更けた頃。

河原に、白鬼が訪れた。

山の端から出たばかりの月が赤く大きい。唯一の光源として、あたりを照らす。

川に水はない。

枯れ草の季節にだいぶ早いが、あたりの草は朽ちて、乾いた熱風が頬をなでる。

「なぜ、彼の女に文を伝えなかったのじゃ」

「……」

目をそらすように伏せたびんを慈しむような目で、見る。

「わしの正体に気づいたのじゃろう」

「……言うな」

かすれた声は、懇願に近かった。

「頼む、言わないでくれ」

白鬼は、首を振った。

願いに対する否、という意思表示にも見えなし、諦めろと諭しているようにも見えた。

そして、告げた。

「わしが、水神じゃ」

たつぷり時をおいて、びんは力なく首を振った。とうとう、言われてしまった。

その事実、認めざるを得ないではないか。

「わしは己の我を通し、天から逃げた。水神としての任を全うせんかった」

白鬼の視線は、遠く天を見据える。

「逃げるときは、こうまで主がわしに執着するとは思わなんだが。それにしても自分の行いの招いた結果がこれじゃ」

自嘲と、枯れた川を見る深く深く悲しみに満ちた目。

「その咎を、そろそろ負わねばならないようじゃ」

その言葉には、簡単に覆らないだろう決意がにじむ。

「びん、文を唱えてくれ。文の力で姿を取り戻さんことには、天に帰る力もなくての」

「でも、白鬼」

今のびんの態度には食い下がるといふ言葉が似合う。

「…天に戻りたくないのだろう」

それは、びんの願いなのかもしれない。白鬼を手放したくないと。

「いいや。戻るよ」

はつきりと明瞭に、聞き間違いもないような声で返答が帰った。

「だから待っている。お前の知るもうひとつの文を」

「嫌だ」

父から教えてもらった文は、二つあった。

もうひとつは堅く口止めされていた。そう、古字と同じくらい。

父は何と言っていたっけ。そうだ、

——神に乞う文。
と。

「嫌だ」

頑なに、首を振った。

そんなびんをなだめるように、白鬼は少年の肩を優しくなでた。

「だったらまわり見ろ。まわりから学べ。そして少しでも賢さを身

につける」

白鬼は…水神は、びんの口調を真似た。

「お前の生の命題は、“生き抜くこと”だろう」
強く、柔らかい声音。

「だったら迷っている場合ではない。ここで迷うことは賢くない」

——違うんだ白鬼。

お前の帰りたくないという気持ちを慮って、というのは本当の理由ではない。

それは少し偽善的すぎる。

「嫌だ」

頑なに、首を振った。

文を言うわけにはいかない。言いたくない。なぜなら…

「お前が帰りたくないから、とかそういうことを言ってるんじゃない。ましてお前が帰らなきゃ俺がどうなるとかそんなことはどうでもいい」

食らいつくように白鬼の袖にしがみついた。

「ただ」

絞り出すように、言葉が出た。

「もう一人は嫌だ」

びんはそう言葉にして、初めて自分の本心を理解した。

真の理由はそれだった。

「だれも俺のことなど見ない」

まなを気にかけたのも、白鬼に手を差し伸べたのも、憐みからでは

ない。情けからではない。そんなことならあんなに切羽詰まった状況で他人の助けなどできない。

——全部自分のためだったんだ。

自分の存在を認めてくれる者を心から欲していた。

一人きりで生きていかなばならないなら、いるもいないも同じではないか。

白鬼に：水神を前に乞う文を唱えるのをためらうのは、本当は水神を慮ってのことではない。

自分自身が孤独にならないため。

なんて独我的な、願い。

十

「お前のその執着が、わしにこの地に堕ちる決断をさせた」
その時、白鬼は確かに微笑んでいた。

「お前がわしにつかの間の自由をくれた」
心から、

「感謝している」

白鬼の枯れ木のような両手が、びんの手を包んだ。
うだるような熱気の中でも、その温かさは心地よい。

「その恩を返したいのだよ」

黄色く濁ったはずの眼は、抜けるように澄んでいた。
白く清らかに成った月を写し、不思議な色を湛える。

白鬼はびんの隣にその痩せた身を落とした。

「わしは、ずっと逃げたかった」

天の束縛から。

「だが、同時に逃げるのが怖かった」

主の元を離れたものの末路を、知っていたから。

「主は堕とした神に“人化”の罰を与える。つまり、地に降りた神は人になる。腹は減るし、暑さ寒さも感じる。そして、死というものの初めて自分に起こりうることを知る」

堕ちたものは、まず“自らの消滅”という考えも及ばなかったものに対して、慄く。

「天を統べる主の気性は荒くての。意に背くものは多く堕とされた。間近でたくさん見たよ。自らの意思で堕ちる者もあれば、逆鱗に触れて有無を言わず堕とされるものもあった。わしは主の傍におったから、その成れの果てもまた見ていた」

そして、地に在って人として生きるということの難しさを思い知る。
「人として生きる術を知らん。皆、野垂れ死によ」

足掻くことすらできず、惨めに路端で人として死んだ神々。

「一月とて、もたん」

屍すら、残らない死。

「だから、わしは束縛に耐えていた。地に墮とされることが怖かったから」

はんがくれた好機も、ものにせず。

「だが、お前の文に引きよせられ、会った時にわかったのだよ。お前は強いわしの縁になってくれると」

美しい音で文を唱える少年に会ったその時から惹かれていた。

この少年の傍にいたいと、思った。

「お前は予想以上にわしを散々甘やかしてくれた」
思い出しても可笑しい。

何度、びんの手に小突かれたことが。

けれど、差し伸べた手は一度も払われることはなかった。

「お陰で自由を謳歌しながら一月も生きながらえたよ」

——楽しかった。

再び、風の勁さを、土の堅さを、火の激しさを水の豊かさを感じた。
腹が満たされる喜びを知った。

汗ばむ陽気に行水する心地よさも、見返りを求めない“贈り物”の
嬉しさも。

治癒で病床から回復した人々が見せる、つややかな頬に浮かぶ笑み
も。

そして、互いを思う優しさも。

「楽しかった。これほどの満足は、神として生きながらえたところ
で、到底得られぬよ」

その言葉には一片の嘘もなかった。

「そろそろ与えられたものを返す時が来た。びんや。文を唱えておくれ」

嘘のない白鬼の心からの願いだった。

聡いびんは、もう気づいているはずだ。自分のすべきことを。

「このままでは天に帰れぬ。堕ちた神は…人の求めに応じるときだけ、神に戻る」

神は人のためにあるのだから。

「さあ、文を」

未練をまだ断ち切れないびんに。

「必ず帰ってくる。約束しよう」

「本当に？」

びんの黒い目が、白鬼をじっと見据えた。

「本当に」

白鬼は、頷いた。

*

*

*

*

*

びんは、もう文を唱えるしかないとわかっていた。
白鬼がそう望み、そして多くの人々がそう望んでいる。

嘆息。

どうせなら、一番いい音を聞かせてやろう。

夜が更けてもまだ熱気をはらんだ空気を、身体に満たすように吸い込む。

ミヲ ノ モリ

アマ ノ ウエ ニ マシマス

ミヲ ノ モリ

ヤライ ヤライ コゾ コゾ

アマ ノ ドウリ ヲ スベヨ

ヤライ ヤライ コゾ コゾ

一気に吐き出した。

恍惚として、周りに融けていく。風と土と火と水と。

一体になり自らを俯瞰して見るような、不思議な感覚。

この世に起こる事象を一つとして見逃さないくらいに鋭敏でいて、何も気づかないほどに緩慢。

今のびんは此処に在って、此処に無い。

「好。素晴らしい声音じゃな」

満足そうに白鬼が笑みを浮かべた。

賛辞を受けて、びんが自分を取り戻す。

びんは少しの疲労を残して、微笑んだ。その時に。

白鬼の周りが、青く煙った。

青い煙幕が、白鬼を覆うように濃度を増していく。

美しい神が、そこにいた。

「びんよ、古字の名は？」

「名は、敏」

決められた問答の様に、阿吽で取り交わす文句。

宙に、間違わぬよう字を描く。

「敏」

透き通るほどに白い手がびんの頬をいとおしそくに撫でた。

「お前の命、しかと受けだぞ」

白い髪が風になびく。月の光を浴びて銀に輝き、上等の錦のように褐色の野にふわりと広がった。

夜と同じ色の瞳が星星を写し、綺羅とまばゆく光った。

白衣を翻し、白鬼は天を仰いだ。

「白鬼、ひとつ教えてくれ」

びんは、その背に問いかける。

「お前の名は？」

「水脈」

ゆっくりと白鬼は振り返る。そして夜の色の目を少し驚かせる。

「びんよ。なぜ泣く？」

首を傾げた。

「笑っておくれ。わしはお前の笑った顔が一等好きでな」
そう言つと、すうと消えた。

遠くになだらかな弧を描く山並み。その手前に緑濃く茂る松の群はその裾を隠し、池の際に敷かれた白石の歩路を彩る。日は穏やかに高い。

池に架かるは朱塗りの橋。橋の先には同色の柱、白壁の楼が景觀に色味を添える。

平安を約束された地。見るものにそう思わせる懐かしく美しい景色。しかし、此処は彼人にとっては苦痛の根源でしかなかった。此処にはただ束縛だけがあった。

「何をしに来た」

燃えるように紅い髪をした童子が姿を見せた。頬や唇はふつくと赤く幼いが、金の眼には、何物をも見通すような底知れない輝きがある。

火神の火座であった。

「主の怒りをかけて地に堕ちた人間ふぜいが、立ち入ってよい場所ではないぞ」

橋の欄干に身軽に飛び乗って、水神、水脈に視線を合わせる。

「最後に、主に逆らいに」

水脈は心底可笑しそうに笑った。

歯を見せて大笑する水脈を見て、火座は一瞬呆けた。

出会いのはじめなど思い返せぬくらい、長い長い付き合いである。

なのに、こんな笑いは見たことがない。

が、一瞬の後にはその眉は険しく上がった。

「人間如きに躍らされよって」

緋の眼に失望と羨望の色が混ざって浮かぶ。

短絡さへの怒り。行動への畏怖。束縛を脱ぐ者への嫉妬。

「お前の任はとうに解かれた」

水脈が堕ちてすぐに新たな水門番を、主は据えている。

「知っている」

「封じられたままの水門を開けるか。お前の身が碎けるだよ」

水門は、水門番にしか開けることができない。

もし他の者が手でも触れようものなら、水門の奥に満たされる滂沱の水を一身に受けて身を砕くことになる。

元の水門番である水脈がそれを知っていることは、明らかだ。しかし火座は改めて忠告した。

これから水脈がしようとしていることの愚かさを分からせるために。

「承知、承知」

ごく軽く、これから散策にでも行くような調子で水脈は応える。

「お前は」

火座は吐き捨てるように言った。

「堕ちるときも、何も言わなかった」

「そして、今度も何も言わないで消えるのか」

主のもとで、大きな憂いも、少しの喜びも分かち合ってきたと思っていた。

なのに、水脈は容易くそれらを脱ぎ捨てる。

自分が軽んじられているようで、悔しい。そして、思っ通りに振る舞う水脈が、羨ましい。

「火座、達者でな」

童子はぐつと何かを堪えた。

「主にも伝えてくりやれ」

それは、皮肉ではなかった。

もう会うことはないと思うと、不思議に何もかもが愛おしい。

未練を一欠片も残さずに歩み去る水脈の目指す先には、水門があった。

それが立ち消えるとは、一体どういふことなのだろうか。

しかし、迷いはない。

長い間、渴えていた。

ただただ理由が分からず、乾きに堪えていた。

そのうち、その乾き自体に疎くなるほどに長い間。

それが今は、こんなにも満ち足りている。

だから、迷いはない。

水脈は臆せず進み、

水門が開いた。

禁を犯しての開門に、水神の身は碎けた。

溜め込まれた水は千切れた水神の亡骸を飲み込み、開門と同時に轟々と音を立てて水路を巡った。

国中の水路へ。遍く。

そして。

雨が降った。

*

*

*

*

*

夜が明けた。

褐色の景色が、今日も暑い日差しに揺れている。

さえとびんはまんじりともせず、日の出から丸二刻も向かい合っていた。

「ほんに、水神は天に帰ったのか」

「帰った」

繰り返す問答。

そして膠着。

終わりがないように思える時間。

不意に、戸の外から差し込む陽が陰った。
パタリ。

軒に水音がして、びんは戸外に飛び出た。
さえも、続けざまに飛び出る。

雨脚はすぐに強まった。

その雨は、赤。

打つものすべてを赤に染めていく。

「うそだ…水脈」

びんは目を見開いた。

この赤が、何を意味するのか。

びんにはわかった。

「必ず帰ってくる、言ったのに」

* * *

赤い雨は、三日降り続いた。

すべてを赤に染める雨にヒトは何かの祟りと恐れ、ただただ祈った。

三日目の早朝、雨が上がった大地は一ヶ月の干を感じさせぬ程緑に溢れていた。

枯れて朽ち果てたかに見えた穂は、一ヶ月の遅れをとりもどすかのように天に向かって健やかに伸びた。地は適度に湿り、川は澄んだ水を湛えた。

赤色は地に吸収され、豊かな赤土となった。

「これは、祟雨ではない。慈雨だ」

人々がそう気づくのに時間はかからなかった。

常平は、緑の節を取り戻した。

十二

鏡には面に少年の影を残した青年が映っている。
黒の直ぐな髪を複雑に結いあげ、眦には紅の化粧を施してある。
褐色の襟が幾重にもついた黒の衣が白い肌によく映える。

慶事のこの日に、澄んだ瞳が憂いを帯びているように見えるのは、
気のせいだろうか。

青年は鏡の前で一つ吐息をつく、手にした小さな金の冠を被り、
冠紐を結えた。
手には流水の紋。

「びん様」
戸の外から、付の衛士の声がする。

赤い雨の降った日から。
びんが再び託所に戻ることはなかった。
戻ることを許されなかった。

稀有な術の才により、都に留めおかれ、神仕として教育を受けた。

そして今日、宮中で成人の儀を迎える。

「びん様」
再び呼ばれて、我に返った。
「入れ」

衛士は室に入ると、その場にかしこまった。

「郷司の慶弔使節なのですが。本来なら直にお目にかける者ではないのですが、びん様に呼ばれた、と言うもので。ご確認までに」
「名は？」

「元は多賀の元村長の孫娘みや、と伝えてくれと。それだけ」
「…みや」

白鬼に屈託ない笑顔を向けた少女が、浮かぶ。
「通せ」

＊ ＊ ＊
＊ ＊ ＊

紅の地に金系の刺繍を飾った慶賀用の正装を身につけた少女が立っていた。

とび色の髪が美しく両肩に垂れ、同色の瞳は静かな光を湛えて思慮深さを感じさせる。

まだ髪上げ前の年齢ではあったが、もう以前のようなあどけなさはなかった。

「この佳き日に成人の儀を迎えられたこと、お慶びを申し上げます」
正式の礼をとる姿は、幼いながらも所作が洗練されている。

「びん様、お会いできてよかった」

「びん、でいい」

「びん…」

意に沿おうと呼んではみるものの、抵抗があるようだ。

「みや。久しいな」

「一介の村娘が、使節の長などと笑ってしまいますね」

「多賀はよく発展した」
びんの言葉にみやは頷いた。

街道沿いで市が立つ以外には、なにもなかった山奥の貧しい山村。耕せば岩石がごろごろと顔を出し土が痩せて貧弱だった土地は、あの“赤雨”以来、肥えた赤土を有する豊かな田畑に成った。雨で土砂が崩れた斜面からは、白輝砂が発掘された。今也多賀は良石の産地として全土から商人が白輝砂の買い付けに訪れ、腕の良い石飾職人たちが多く集う。非常な活気に包まれた街だった。

「ほんに。ひもじい思いをするものは多賀に一人とておりません」
晴れ晴れとした快活な微笑を浮かべる少女。

今、多賀の人々はこのような笑顔を浮かべて日々を過ごしているのだろう。

びんも釣られるように笑った。

「して、何用だ？」

開式の刻が迫っている。

「差し出がましいのは承知ですが。こればかりはどうしても」

みやは居住いを正し、びんを真っ直ぐに見つめた。

「ようやくと、醜薬師さまを見つけました」

その面持ちは、真剣。

「なぜ、と思われませんか」

びんの怪訝な、疑心に満ちた表情を察したのだろう。やや間をおいて。

「これは醜薬師さまとの約束で、堅く口止めされていたことでもあります」

呟くように言った。

「醜薬師さまは私が急転の病に罹った折に。幼い私に気付にと、少

し、」

言うか言わぬか。みやは少し考えたようだった。

「その血を分けて下さいました。それからというもの私には」

みやの目が、微かに赤く輝く。

「見えないはずのものが見えるのです」

*

*

*

*

*

みやの懷から、白蛇が姿を現した。

その手足のない優美な肢体から、ふわつと青霞が立ち上った。

「醜薬師さまはいつもこの青霞に囲まれていた…」

みやの目は、まだやや赤みを帯びていた。

「すぐにわかりました」

「それで、びん様に…」

みやはびんの表情を見て、それ以上事を説明するのを止めた。

みやの腕から放たれて、地に降りた白い蛇の濃紺の瞳は、しっかりとびんを捉えていた。

「なぜ泣いている。お前に良かれと思ったのに」

赤い舌を見せながら、高圧的に言い放つ。

その傲岸不遜な態度。

「私はお前のあの顔が好きなのだ。笑っておくれ」

びんは、口角を微かに上げた。

上げようと努力した。

「白鬼…いや、水脈。ヒトは嬉しい時にも泣くんだよ」

気のきいた文句など言えない。

言いたいことは一つ。

—— お前がいれば、何もいらぬ。

みやは恭しく一礼して正面の戸から姿を消した。

*

*

*

*

*

「びん様、御前にまかりこすお時間で」

下仕えが戸の外から呼ばわった。

白蛇はびんの衣の内に這い上がり、腕に静かに絡まる。

「今、行く」

清成帝の治世三十年。神仕びん成人の儀を以て第一席に任ず。

この事柄は史記に二文、記されるのみ。

その後びんに関する記述は、ない。

書物に残らずとも、びんの生が終わるまで、

数奇な運命の輪は回り続ける。

十二（後書き）

長々と読んでいただきありがとうございました。

「赤雨編」とサブタイトルがついている通り、常平を舞台にした話をシリーズで今後も書いていこうと思っています。

今回でてきた登場人物についても、まだまだ書ききれていないので…。

感想・ご意見などありましたら、ぜひお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879p/>

常平奇譚 赤雨編

2010年11月27日08時45分発行